



毎小学生新聞



PR 2016 版

製作・発行
毎日小学生新聞編集部
発行所 毎日新聞社©
東京本社 東京都千代田区一ツ橋1-1-1



未来を 描く力

「2020年大学入試改革」「アクティブラーニング」「グローバルな人材」「中高一貫教育」。イメージのわからない言葉だと感じているでしょうか。これだけは確かです。日本の教育がこれまでにない変革を迎えています。「うちの子はまだ小学生だから」と思っていないですか。京都大学で、卒業から就職への移行（トランジション）をテーマに研究を行っている京都大学高等教育研究開発推進センターの溝上慎一教授は「小学生を持つ保護者は、これまでの考えを捨ててください」とアドバイスします。中学校でアクティブラーニング型授業を指導する実践家でもある溝上教授に聞きました。【聞き手、編集長・西村隆】

変革の時代に 求められる 協働性 Active Learning

溝上 慎一さん

京都大学 高等教育研究開発推進センター教授

■ 社会の変化に合わせ
大学入試改革

2020年にはセンター試験も様変わりし、知識を問うマークシートから、考える力を問う記述式に変わる方向に向かっていきます。なぜ、大学入試が大きく変わるのか。それは社会の変化とともに、求められる人材が変化したからです。

私は、大学生が卒業して就職していく移行期を研究しています。私の勤める京都大学は、就職内定率だけをみると高い数字をはじき出します。しかし、景気の変動にはこのような大学でも簡単に影響を受けて、リーマン・ショックの後の年では、（4年生の就職希望者のなかで）11月時に就職先が決まっていたのは66%にしか過ぎませんでした。しかも第一志望で決まった者はその半数に過ぎませんでした。問題は、就職内定率にあるのではなく、近年一般化した卒業後の離転職にあります。離転職自体は悪いことではありませんが、たいいていの離転職先は条件が悪くなることを知らなければなりません。卒業後、力強く仕事ができているかを視点に、その大学に進学したと、大学での教育の成果を見ていかなければなりません。

これまで、就職は大学のブランドやいわゆる偏差値で決まる要素が大きかったと思います。いつの時代も、学歴を乗り越えた層はいましたが、大半はそこまでいきませんでした。

＝2面につづく



毎日小学生新聞は2016年12月で
創刊80年を迎えます

7日間無料で試し読みできます。
くわしくは8面をごらんください。

インデックス

1-3 Active Learning
溝上 慎一教授インタビュー
4-5 毎日小学生新聞のご紹介
6-7 私学の入試問題で問われている力
日能研教務部が分析する最新の入試問題2016

アクティブラーニング時代の 「できる子」とは……

※編集部作成、溝上慎一教授監修

- ☐ すぐに必要とされない知識にも興味を持っている
- ☐ 他人に興味を持ち、立場や考えの違う人とかかわりを持つことをいとわない
- ☐ 正答の満足より、問題解決を楽しんでいる



■プロフィール 溝上慎一（みぞかみ・しんいち）

1970年、福岡県生まれ。京都大学高等教育研究開発推進センター教授。学校法人桐蔭学園教育顧問。専門は青年心理学、高等教育。著書に『どんな高校生が大学、社会で成長するのか―「学校と社会をつなぐ調査」からわかった伸びる高校生のタイプ』『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』『現代青年期の心理学適応から自己形成の時代へ』ほか多数。

協働をベースとした 個性的な能力と知識

1面からつづく

■今ようやく

アクティブラーニング

それが2000年前後から崩れてきました。大卒のニート、無業者が社会に認識され始めたころです。良い大学を出ることが、必ずしも良い就職につながらなくなりました。個人の知識や能力に問題がなくなるとも、対人関係やコミュニケーションをふまえた協働が弱いばかりに、厳選採用から求められることが珍しくなりました。自分に合う仕事や企業と出会えないミスマッチもこれを加速させます。協働については、15年たって今ようやく、アクティブラーニングという考え方にたどり着いたといえるでしょう。

今、社会が求める人材は、協働をベースとした個性的な能力と知識です。協働は、部活動やアルバイトだけでは育ちません。なぜなら、それは課題があつての学習だからです。部活で頑張る子どもが、ディスカッションを一生懸命するとは限りませんし、前に出てのプレゼンテーションが秀逸であるとは限りません。それは、協働が知識や情報をもとに課題に取り組み学習の

LEARNING



環だからです。いわゆる勉強とこの意味での協働とは強い関係性を持っています。また、個性的な能力と知識の手前、基礎的な知識の習得が必要であることは言うまでもありません。基礎のない者に個性も応用ありません。社会が求める人材は、かなりハードルが上がっていると言えます。

■中高の教育も

変わりつつあります

この流れに呼応して、中高の教育にアクティブラーニングが導入され始め



ています。これまでの教師から児童・生徒への一方的な知識伝達型講義だけでなく、書く・話す・発表するなどの活動を組み込み、その過程で思考力や判断力の能力、協働性を育てることが求められています。

私が教育顧問として指導している桐蔭学園（神奈川県）では、中学1年から6年かけて全教科におけるアクティブラーニングを導入し始めています。

協働性の背後にある将来の意識や社会性を育てるために、キャリア教育や探究的な学習も体系的に組み込んでいっています。

私が注目している鷗友学園（東京都）でも、同様の取り組みがしっかりなされています。授業見学で印象に残っているのは、高校の理科の実験で、グループに役割分担の指示を出さずとも、生徒は自分たちで役割を分担して、協働で作業を進めていく姿でした。中学から、生徒全員が協働作業の意義を教えられていることがよくわかったシーンでした。中高一貫校のメリットと言えるかもしれません。

■家庭と塾の役割

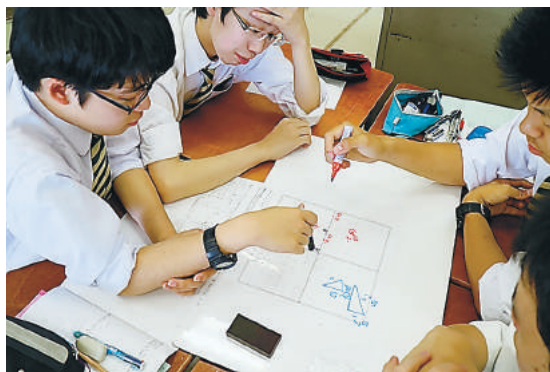
小学生時代には家庭の役割が大切です。子どもは、親を通して社会を学びます。親もアクティブラーニングの姿勢で臨む必要があります。

教育熱心な親ほど、自分の経験で考え、自分の子どもに当てはめてしまいがちです。自分が受けた教育の時代とは違うことに、留意しなければいけません。

＝3面につづく



「いい大学に入れば、いい人生を送れる」という考えはもう成り立ちません



授業の写真はすべて桐蔭学園

2面からつづく

「いい大学に入れば、いい人生を送れる」という考えはもう成り立ちませんし、大きな会社だからこそ一発で倒産という危機に常にさらされています。「いい人生」の中身は、子どもが決めるしかありません。

「いい大学」もそれに基づいてのみ決まってくる。ブランドのある、偏差値の高い大学を出ても、良い仕事

ACTIVE

できていない人たちをもっと見るべきです。逆も然り。そういう大学を出ていなくても、高収入、好条件の仕事をしている人は山ほどいます。子どもがいったいどのような人生を築きたいと思っているのか、進学をテーマにぜひコミュニケーションしてください。

■社会への関心育む

本や新聞

目の前の勉強のために読ませるのではなく、将来のため、教養を身につけるため、くらの気持ちで、小学生新聞を与えてほしいと思います。言葉は道具です。美しい言葉を使うことは教養です。その背後には、社会への関心があり、それが知への探究にもつながります。本と新聞を読むという姿に

は、こういうことが隠されています。

■自分自身を

振り返って

私は、今で言うところの知的好奇心旺盛、自らガンガン学ぶ探究派だったと思います。しかし、中学以降は、正解だけで評価される受験勉強にかなり不適応を示し、受験の結果もあまり良いものではありませんでした。

世の中がこれだけ新しいものを目指すようになって、基礎（正解）を超えろ、と言われるようになって、ようやく私は楽しく生きられるようになってきたと感じます。

でも、振り返れば、創造の手前には、基礎的な学習が必要です。伝統芸能などでは「守破離」と言いますね。基礎（伝統の型）を学んでこそ、伝統を破って離れていけるということです。私はそこを軽視していました。大学以降、大きく反省し、やはり習得と活用、探究のバランスが必要なのだと思います。

アクティブラーニング時代の「親の姿勢」とは……

※編集部作成、溝上慎一教授監修

- ☐ 子どもに多角的な見方を教え、引き出している
- ☐ 子どもの話をよく聞いて、よいところをほめている
- ☐ すべてに満点を求めず、苦手なところは標準程度まで、できる分野をもっと伸ばすことに力を入れている